詩編５６編の黙想（2021 年 9 月 1 日東福岡教会祈祷会奨励松見俊）

神に依り頼めば恐れはありません。肉なる者は何をなしえよう

頭書にはエルサレム神殿礼拝指揮者による「はるかなる（離れた地にある）沈黙の鳩」という曲で歌うとある。また、ダビデがガトでペリシテ人に捕らえられたときの詩とある。該当の出来事は、ダビデがサウルに追われ、敵対していたペリシテ人の間で狂人の振りをして生き延びる画策をした時である。「離れた地にある沈黙の鳩」は孤独で沈黙を強いられる人の苦悩を良く伝えている。しかし、いつも指摘するように、現在の歴史的・批判的註解では、ダビデが必ずしも作詞者ではないとするので、ダビデ自身の歴史的文脈を念頭におきながら、それに拘らないスタンスで読むことにする。「神はわたしの味方である」（10 節）はローマ８：31「もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか」を思い出させる。リフレインの「神の御言葉を賛美します。（主の御言葉を賛美します）神に依り頼めば恐れはありません。肉に過ぎない者が（人間が）わたしに何をなしえましょう」（5 節、11、12 節）をメッセージの中心として味わいたい。これは、ヘブライ 13: 6 にこだましている。「わたし」という第一人称単数がパウロでは複数となっていることは、この歌が 600 年近く歌い継がれ、また、キリスト教徒たちによって 2000 年歌い継がれて「わたしたち」のものとなっていることを示していないだろうか？！「神に依り頼めば恐れはありません。肉なる者は何をなしえよう」。

１．神よ、わたしを憐れんでください

第一行目は神への呼びかけである。「神よ、わたしに対して憐れみ深くあってください。」（hānnênî ‘elōhîm,　hānan 恵み深く、憐れみ深くある。創世記 33:5 参照。)呼びかけとしてはもう一つ 3 節に「高くいます方よ」（mārōwm）とある。詩人は敵対者に「踏みにじられている」苦境をひたすら神に訴えかけている。「戦いを挑む者」（2 節、3 節）「陥れようとする者」（3 節）「災いを謀り、待ち構えて争いを起こし、命を奪おうとして後をうかがう者」（7 節）が肉薄していることを訴える。ありのままを神に訴えよう。

２．恐れを抱く

敵対者に直面するとき、人は恐れを抱く。しかし、その恐れは「神に依り頼めば恐れはありません」という神の恵みに限界づけられた恐れに過ぎない。6 節「わたしの言葉はいつも苦痛となる」は日本語として理解するのが困難である。口語訳は「（敵対する）彼らはひねもすわたしの事を妨害し、その思いはことごとくわたしにわざわいします」である。ヘブライ語直訳「一日中、彼らは私の言葉（ダーバールは「言葉」という意味と「事柄」という意味がある）を捻じ曲げ、彼らのあらゆる想い（複数）はわたしに対して悪しきものである」。ダビデ自身が狂人を装ったのではあるが、正常な関係性は成立せず、言葉は正しく聴かれず初めから曲解され、対話や弁明は成り立たない。だからこそ、ダビデは狂人を装ったのであろうか？　まさにそのような人間関係は「恐れ」でしかない。

しかし、信仰者にはおそれや嘆きを訴えかけるお方がいる。「あなたはわたしの嘆きを数えられたはずです。あなたの記録にそれが載っているではありませんか。あなたの皮袋にわたしの涙を蓄えて下さい」。具体的にイメージできる３つのこと、数を数えること、記録帖に記録されていること、水やワイ

ンをいれる皮袋に涙を溜めること。最後の表現は様々な文学や詩に用いられている！

３．神に依り頼む

信仰者は恐れないのではない。恐れを抱きながら「重荷を主に委ね」(55:23)、神の処に身を寄せるのである。「恐れを抱くとき（はいつも)、わたしはあなたに依り頼みます ‘ebtāh, 」。「神に依り頼めば恐れはありません」。Bêlōhîm bātahtî lō ‘îrā , bātah 何かに誰かに自らを託すこと、まさに、任せること！多分、神に任せても自らの内には不安も恐れもあり続けるであろう。しかし、その時責任を持つのはもはや自分自身ではなく、信託したそのお方なのである。そのお方を見上げること。だからこのリフレインには、まず神ご自身が働かれることを示すため「神の言葉、主の言葉を賛美します」が先立ち、「人間（肉）は何をなしえようか」が加わっている。

４．神はわたしの味方である！（10 節）

ローマ８：31 の説教で「味方である」とは「自分の側にいる、自分の側の陣地にいてくれる」ことを意味していると註解した記憶がある。果たしてヘブライ語はどうなのだろうか？「なぜなら、神はわたしのために（あること）をわたしは知っているから」(kî – ‘ĕlōhîm lî）ギリシヤ語と同じような表現である。私は弱く、貧しく、恐れに苛まれる者であっても自分のために神が存在し、敵対者がいかに手ごわいものであっても彼らは神ではなく、肉である、人に過ぎないのである！これは確かである。

５．神への感謝

最後は神への感謝・賛美で終わる。神よ、あなたに誓ったとおり、感謝の捧げ物をささげます。あなたは死からわたしの魂を救い、突き落されようとしたわたしの足を救い、命の光の中に、神の御前を歩かせてくださいます」。Hissāltā napšî mimmāwet 神の前をわたしが歩むことから外れない（突き落されない）ように私の足を（保ってください)。